

## テーマ 高齢者と廃用 (disuse) 症候

司 会 浅井 仁

平成9年11月25日(火) 15時～17時

場 所 金沢大学医学部保健学科会議室

### 高齢者と褥創

看護学専攻 須釜 淳子

褥創発生危険群として寝たきり高齢者があげられる。これらの対象に褥創予防ケアとして2時間ごとの体位変換をするだけでは褥創の予防は困難である。この理由として、老化や長期臥床からくる身体の形態変化(変形・拘縮)や機能低下、ケアの内容等が影響しているためと考えられる。

医療談話会では、特別養護老人ホーム、介護力強化病院での実態調査、高齢者を対象とした基礎実験をもとに報告した。高齢者に発生する褥創は成人のそれと比較して侵襲が皮下組織または筋・骨に達する深いものであり、かつ再発例が多い。発生要因としては、変形・拘縮による骨突出(圧力の増加)、栄養摂取量低下による低アルブミン血症(組織耐久性の低下)が挙げられる。

具体的看護のひとつとして、当看護学専攻の褥創研究グループがこれまで取り組んできた圧力に対するケア、つまり低圧保持上敷エアマットレスの開発過程と臨床応用結果について述べた。

### 高齢者の転倒と骨折

看護学専攻 平松 知子

高齢者は転倒や転倒による骨折のリスクが高く、自信喪失や寝たきりなどQOLの低下につながり易い。わが国では転倒の発生数は増加しており、転倒・骨折予防に対する積極的な取り組みが求められている。

高齢者の転倒の特徴は、居室内など日常生活の場で転倒しやすいことである。骨折の約90%は転倒によるものであり、大腿骨頸部骨折や脊椎圧迫骨折が多い。予防として、生活環境の整備や食生活の配慮、基礎疾患の治療、散歩の習慣、易転倒・易骨折性の自覚などが挙げられる。高齢者は個人差が大きく、個別の対応が必要であるが、具体的な対策は講じられていない。このため、詳細で正確な実態調査の実施、高齢者のレベルに応じた予防対策の明確化・予

測スケールの作成が課題となろう。

私達は、特にリスクの高い入院高齢者への予防対策を立てるために、易転倒性を重心動揺と筋力、易骨折性を骨密度から経年的に測定し、同時に移動動作を中心とした日常生活の把握、また、転倒および骨折の実態調査などを行ってきた。その中から、入院高齢者と在宅高齢者の平衡機能・骨密度の経年的な比較や、同一入院高齢者の骨折の有無別転倒場面の比較の結果を紹介し、そこから示唆された入院高齢者の転倒および骨折の予防・予測の看護について報告した。

### 廃用性筋萎縮とその予防について

理学療法学専攻 山崎 俊明

長期臥床や安静による廃用性筋萎縮の予防は、理学療法分野における重要な課題のひとつである。特に下肢骨格筋では荷重が重要な因子であることが、宇宙環境における生体の形態的および機能的変化の研究により再確認されている。

近年、無重力環境のシュミレーションとして開発された後肢懸垂法は、筋活動量や水分代謝などから、長期臥床に近似したモデルと考えられている。筆者らはこのモデルを使い、特別な運動負荷を加えず荷重のみを刺激として、その効果を動物実験により検索してきた。今回は、ラットのヒラメ筋を実験材料とした組織化学的(筋湿重量、筋線維タイプ構成比率、線維断面積)分析結果から、1) 荷重持続時間、頻度、間隔により萎縮予防効果に違いがあること、2) 1日1時間の荷重を、懸垂開始翌日より毎日実施すれば、筋萎縮の進行を量的に予防可能なことを述べた。

廃用性筋萎縮の進行中に、実施可能な範囲の荷重刺激のみで、萎縮を完全に予防することは困難と考えられる。しかし、効率的な方法で進行を抑制しておくことは、回復に要する期間の短縮にも効果的と考えている。